

令和 3 年 6 月 10 日現在

機関番号：34101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K02404

研究課題名(和文) 異形の近世注釈の系譜学

研究課題名(英文) Research on the genealogy of annotative research of early modern Japanese classical literature

研究代表者

田中 康二 (TANAKA, Koji)

皇學館大学・文学部・教授

研究者番号：90269647

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本居宣長の国学は、中世歌学をルーツとし、同時代の儒学を仮想敵として近世中期に成立した日本古典学の体系である。そこには文学研究という側面と復古思想の鼓吹という側面があって、複雑な樹形図の中に描くことができるものである。そのような進化の途上において、国学は二度大きな変容を経験した。一度目は近世後期(幕末)であり、二度目は昭和十年代である。近世後期においては、富士谷御杖による宣長国学の受容が最も異形の受容形態を取っている。言霊倒語説による古代文学の解説は宣長国学のもう一つの可能性を示した。また、昭和十年代の教科書・辞書における敷島の歌の解釈は、当時の日本精神論の枠組みの中で変容し、曲解された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本居宣長の国学は学問として文学と思想の両面の属性を持つことから、後世において誤読や曲解を受けることが多かった。だが、その内実についての検証は必ずしもきちんとなされてきたわけではない。本研究課題では宣長の国学がいかんにか誤読され、曲解されたのかという点について、近世後期においては富士谷御杖、昭和十年代において教科書・辞書を対象として、資料を調査収集し、具体的に分析し、宣長国学に関する誤読・曲解が起きる原因を究明した。このような現象は宣長国学のみに限定されることなく、多少とも思想的な色彩を帯びた学問体系は、時局に利用される側面があるということに應用できると推察される。

研究成果の概要(英文)：Motoori Norinaga's Japanese classical literature was a system of the Japanese classic study materialized in the middle of modern times, and it was materialized considering the study of a medieval song as the origin, and was simultaneously materialized considering modern Confucianism as an enemy. In the way from which it evolves, Japanese classical literature experienced the twice big change. Japanese classical literature changed at first in the second half of modern times, and changed into the Showa 10s renewedly. Fujitani Mitsue transfigured the Norinaga's Japanese classical literature most greatly. In the context of the Japanese idea of spirit, Shikishima's song was re-interpreted and was misread in the Showa 10s.

研究分野：日本近世文学

キーワード：国学 本居宣長 富士谷御杖 太平洋戦争 敷島の歌 日本精神論 教科書

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

日本古典文学の研究は国文学が成立する遙か以前から始まり、現代に至るまで形を変えつつ存続している。古代に始まり、中古・中世に醸成され、近世に集成・発展し、近代に受け継がれてきたのである。個別の作品研究には濃淡の差があるのは確かであるが、総体として見た場合、相互に影響を受けあって展開していると言ってよい。鈴木健一編『江戸の知 近世注釈の世界』（森話社、2010年）によれば、近世注釈は集成（インプット）と公開（アウトプット）である。質量ともに中世を凌駕する注釈書を世に問うたのが近世という時代であった。

申請者もこの書籍の企画に賛同し、「『土佐日記』主題論の展開 『土佐日記解』秋成序文の受容」という論文を執筆した。それは一義的には上田秋成が『土佐日記』研究の一環として草した序文の中に、真淵国学の神髓が表現されていることを指摘したものである。要するに、女性仮託という方法は、亡児を嘆くことを女々しいこととする後世のイデオロギーによって本心を明かせない苦悩を表現したものであると秋成は理解した。この序文は真淵国学を受け継ぐものとして受容され、多くの者が影響を受けた。その中に極めて特異な観点を有する注釈が存在することに思い至った。それは富士谷御杖『土佐日記灯』である。御杖は秋成の土佐日記観を粉碎するために、紀貫之が『土佐日記』を執筆した理由を土佐という小国への任官の憤りにあることを背景として書かれたという、言霊倒語説をうち立てた。「言霊倒語説」とは、直言すれば災いが起き、倒語（反対の言葉や無関係の言葉）を用いると幸いが訪れるという表現論である。御杖によれば、言葉の表面上の意味を突き破って、裏の意味をあぶり出し、その先に表現者の本心を探り当てることによって、はじめて文学作品の読解が完成するというわけである。この言霊倒語説によって、日本古典文学は大胆に読み替えられ、それまで知られていなかった姿を読者の前に現すというのである。御杖の言霊倒語説は孤高の説であり、極めて魅力的で可能性があるにもかかわらず、これを引き継ぐ者がいなかったために、そのまま埋もれてしまったと言える。このような経緯の下に富士谷御杖の国学は現代から見れば、孤高の学問体系となった。

ここにおいて、富士谷御杖の国学を近世後期における国学の一つの到達点であるという仮説に基づき、国学が後世において受容される形の中に、国学本来の姿が現れるという命題を得た。この命題を検証し、その真偽を判断することが次の仮題となる。

## 2. 研究の目的

江戸時代は古典文学の研究が花開き、さまざまな手法が模索された時期である。それは中世までに蓄積された研究を集成するという営為と、出版という流通革命による流布、そして世界一の識字率を背景にした啓蒙、というファクターが相俟って、古典研究はその裾野を大きく広げていった。そうして、古典研究は熱を帯び、ついに沸点に達した。その結果、古典研究の中にきわめて異色で異彩を放つアプローチが、ジャンル横断的に、そして時代縦断的に出現したのである。それらの研究法は近代の文学評論を先取りする斬新さと、誤読と見做されかねない深読みを兼ね備えた魅力的な研究である。それらを系譜学的にたどることによって、近世注釈史を立体的に構築することができると確信する。

具体的には二つの方向性を想定している。一つ目は、近世後期における富士谷御杖の国学、とりわけ古典文学の注釈が圧倒的に本居宣長の国学の影響を受けつつ、独自の要素を付加するに至る経緯を検証することである。二つ目として、近代の人文科学（国文学・国史学・哲学思想）が本居宣長の国学を受容するに際して、いかに誤読と曲解を繰り返して、同時代思想と共鳴したかということを検証することである。幕末と昭和十年代という二つの時期における国学の姿の中

に国学の本質を見出そうという目論見である。

### 3. 研究の方法

本課題研究は、近世後期（幕末）と昭和十年代の相異なる二つの時代が、本居宣長の国学をいかに受容したかという観点から、国学の見えざる本質を明らかにしようとするものである。まず、近世後期においては、文学研究が質量ともに豊富に発展した証として、突然変異的な注釈法が花開いたことを実証することを目的とする。それは、(1) 俳諧における各務支考、(2) 漢学における葛西因是、(3) 和歌および日本古典文学における富士谷御杖、(4) 源氏物語研究における萩原広道である。それは記号論・構造主義詩学を先取りする研究方法である。それらの研究に歴とした影響関係を見出すことはできないが、そこには固有の言語観・解釈学の方法・世界観哲学の視角という三つの共通点があり、白話小説批評用語という共通の基盤がある。以上のように、ジャンル横断的な比較研究によって、富士谷御杖の国学が突然変異的な現象に見える面はあるものの、近世後期の同時代現象として捉えることができることを検証する。

次に昭和十年代の国学受容については、次のような方法によって研究を遂行する。すなわち、本居宣長の自讃歌（敷島の歌）「敷島の和心を人問はば朝日に匂ふ山桜花」をめぐって、これがいかに享受されたか、という点について、次の三点の方向から調査研究を行う。一つ目は、敷島の歌が尋常高等小学校・旧制中学校における国語・国史・修身の教科書に掲載され、教室で教えられたことを可能な限り再現するべくデータを収集する。二つ目は、教育学辞典と哲学辞典において、宣長国学がどのような位置にあったかということ进行调查する。三つ目として、当時の日本精神論との関わりの中で、敷島の歌がいかに誤読され、曲解されるにいたったかを検証する。以上の三点にしぼって昭和十年代の国学の受容史をたどっていく。

### 4. 研究成果

本研究課題は、次の三点の成果を得た。

- (1) 国学の同時代における受容
- (2) 国学の近世後期における受容
- (3) 国学の近代（特に昭和十年代）における受容

以下、研究発表および研究論文に即して具体的に研究成果について簡潔に説明していく。

まず、(1)「国学の同時代における受容」については、賀茂真淵『冠辞考』、本居宣長『おもひ草』『美濃の家づと』『馭戎慨言』、村田春海『竺志船物語』をめぐって、それぞれの著作が同時代にどのように受容されたのかという観点から、その実態と内実を検証した。その結果、各作品は著者の意図を大きく外れることなく受け容れられ、新たな国学書を生み出す契機となったことが判明した。次に、(2)「国学の近世後期における受容」については、富士谷御杖の言霊倒語説の成立が、宣長国学に圧倒的な影響を受けながらも、独自の言語思想に裏付けられた発想によって唯一無二の表現論および解釈学を構築することができた経緯を明らかにした。最後に、(3)「国学の近代（特に昭和十年代）における受容」については、「宣長国学の表象」という観点から、尋常高等小学校・旧制中学校における国語・国史・修身教科書に掲載された宣長をめぐる言説が宣長のイメージ形成に果たした役割について考察した。国語・国史・修身という三科目にわたって宣長国学が取り上げられるということ自体が昭和十年代の特徴であって、敗戦によってその扱いが大きく変容した。国語教科書は、いわゆる墨塗り教科書の調査によって宣長の歌が墨塗りの対象とされたことを明らかにし、敷島の歌および「松坂の一夜」が消失したことを確認した。国史教科書は一定期間の授業停止期間を経て、国学が愛国的思想から近世諸学問の一つという扱いに変更されたことを明らかにした。修身教科書はGHQによる「神道指令」によって教科

自体が廃止となり、以後今日に至るまで復活していない。次に、宣長国学が満洲事変を契機として流行した日本精神論という同時代イデオロギーの文脈で認識され、誤読・曲解された。敗戦を経て、誤読された宣長国学のイメージを払拭することが声高に唱えられた。

以上、三点において獲得された成果を要約すれば、国学は各時代においてさまざまな顔を見せるが、とりわけ乱世（幕末・昭和十年代）において、より大きく、よりドラマティックに国学体系の変容が見られることを実証した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 田中康二	4. 巻 59
2. 論文標題 日本精神論の敗戦 宣長国学の表象をめぐって（その二）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 皇學館大学紀要	6. 最初と最後の頁 52-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中康二	4. 巻 8月臨時増刊号
2. 論文標題 本居宣長の『冠辞考』体験	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 140-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中康二	4. 巻 54
2. 論文標題 本居宣長『草庵集玉箒』「歌の魂なし」再考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『和歌文学大系』69巻月報	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中康二	4. 巻 58
2. 論文標題 本居宣長『おもひ草』の研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 皇學館大学紀要	6. 最初と最後の頁 29-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中康二	4. 巻 57
2. 論文標題 小学教科書の敗戦 宣長国学の表象をめぐって(その一)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 皇學館大学紀要	6. 最初と最後の頁 33-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中康二	4. 巻 51
2. 論文標題 『竺志船物語』の設定	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 国文論叢	6. 最初と最後の頁 62-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 6件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 田中康二
2. 発表標題 「もののはれ」こそ日本の心性。「漢意」に異を唱える「本居宣長」
3. 学会等名 国際高等研究所・第七十回「ゲートの会」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中康二
2. 発表標題 近代国学の青写真 本居豊頼「建白書」を読む
3. 学会等名 京都府神社庁講演会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中康二
2. 発表標題 シンポジウム「国学と古代語研究の現在」、「人文系失敗学の提唱 をかし・おかし別語説の教訓に学ぶ」
3. 学会等名 日本語学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田中康二
2. 発表標題 宣長サミット・パネルディスカッション「今、なぜ、宣長か」
3. 学会等名 関西元氣文化圏推フォーラム（三重県）（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田中康二
2. 発表標題 面従腹背 村田春海
3. 学会等名 鈴屋学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田中康二
2. 発表標題 江戸の思想と文学（2）歌学としての国学 本居宣長を中心に
3. 学会等名 群馬県立土屋文明記念文学館（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 河野貴美子、Wiebke DENECKE、新川登亀男、陣野英則、田中康二	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 83-97
3. 書名 日本「文」学史 第三冊 「文」から「文学」へ 東アジアの文学を見直す (日本「文」学史3)	

1. 著者名 鈴木健一、田中康二ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 27-50
3. 書名 明治の教養 変容する 和 漢 洋	

1. 著者名 鈴木健一	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 193-218
3. 書名 輪切りの江戸文化史	

1. 著者名 松田浩、上原作和、佐谷眞木人、佐伯孝弘	4. 発行年 2017年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 172-175
3. 書名 古典文学の常識を疑う	



1. 著者名 鈴木 健一、杉田 昌彦、田中 康二、西田 正宏、山下 久夫、大山 和哉、金田 房子、水谷 隆之、高野 奈未、中森 康之、木越 俊介、天野 聡一、伊與田 麻里江、門脇 大、佐藤 温	4. 発行年 2018年
2. 出版社 森話社	5. 総ページ数 251-272
3. 書名 江戸の学問と文藝世界	

1. 著者名 田中 康二	4. 発行年 2017年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 1-257
3. 書名 真淵と宣長 「松坂の一夜」の史実と真実	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------